研究論文

Budapest Open Access Initiativeの思想的背景とその受容

Philosophical background of Budapest Open Access Initiative and its acceptance

岡部晋典[1*], 佐藤翔[2], 逸村裕[2]
Yukinori OKABE[1*], Sho SATO[2], Hiroshi ITSUMURA[2]

1 近大姫路大学　教育学部
Factory of Pedagogy, KinDAI Himeji University
〒671-0101 兵庫県姫路市大塩町2042-2
E-mail:yuki.okabe@gmail.com
2 筑波大学大学院　図書館情報メディア研究科
Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba
〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2
E-mail: {min2fly, hits}@slis.tsukuba.ac.jp
*連絡先著者 Corresponding Author

本稿ではオープンアクセス運動の契機となったBudapest Open Access Initiative（BOAI）について分析し，これがどのような意図のもとで公開されたか調査した．まず，BOAIを提唱し，オープンアクセス運動を支援している財団であるOpen Society Institute（OSI）と，その設立者であるGeorge Sorosについて紹介し，彼らの思想的根拠であるKarl R. Popperの提唱した「開かれた社会」概念について概観した．また，BOAI中にその思想が影響していることを明らかにした．次に，オープンアクセス運動に関連する文献群中でのPopperおよび「開かれた社会」への言及状況とBOAIの受容状況の定量的計測から，オープンアクセス関係者の間での「開かれた社会」関連思想の認知状況を検討した．その結果，OSIは「開かれた社会」という政治思想の実現を目的にオープンアクセス運動に関与しているにもかかわらず，他のオープンアクセス運動関係者はこの思想の存在には言及していないことがあきらかになった．

Open access movement is a hot issue in a recent Library and Information Science. This article analyzed ‘the Budapest Open Access Initiative (BOAI),’ which triggered the open access movement. First, this article introduced the foundation, ‘the Open Society Institute (OSI),’ which has proposed and supported BOAI, and its founder, George Soros. We also surveyed their philosophical basis, the

concept of ‘Open Society’ -Karl R. Popper advocated. In addition, we revealed that BOAI was affected by the concept of ‘Open Society’. Second, we revealed how people accepted the concept of ‘Open Society’ by quantitative analysis of literatures about open access. As a result, it was revealed that while OSI participated to the open access movements to achieve the concept of ‘Open Society’ people in open access movement have not referred to OSI’s intention.

キーワード:ブダペスト・オープンアクセス・イニシアティブ， オープンアクセス， 開かれた社会， カール・ポパー， オープン・ソサイエティ・インスティチュート， ジョージ・ソロス
Budapest Open Access Initiative, Open Access, Open Society, Karl Popper, Open Society Institute, George Soros

1 はじめに

1.1 本研究の背景

本稿ではオープンアクセス（OA）運動を支援している財団の一つ，Open Society Institute（開かれた社会財団，OSI）が中心となり発布したBudapest Open Access Initiative（BOAI）[1]とその周辺について論じる．

近年の学術情報にかかわる主要な問題の一つにOA運動がある．これはインターネットを介して学術論文等への障壁のないアクセスの実現を目指す運動である．この運動の直接の契機とされるものがBOAIである．

BOAI以前のOA運動の歴史に関するまとめとしては，時実[2]や倉田[3][4]による論考がある．時実はBOAI以前のOA運動の源流として，物理学分野のプレプリント・アーカイブであるe-print archive（現在のarXiv.org）[5]の開設，学術雑誌の価格高騰問題とそれに対抗するためのアメリカ研究図書館協会（Association of Research Libraries :ARL）によるSPARCプロジェクトの存在，アメリカ国立衛生研究所（National Institute of Health, NIH）による生命科学分野の電子リポジトリ・E-biomed（後のPubMed Central）の試み，Public Library of Science（PLoS）[6]の活動，OA雑誌のビジネスモデルを実現したBioMed Central社（2008年にSpringer社により買収）の存在を挙げている．倉田はこれらに加え，1994年にStevan Harnadが行った，出版社を紙媒体から電子媒体に移行させ契約コストを削減させる，いわゆる「転覆計画」ないしは「破壊的提案」と呼ばれる公開メーリングリストへの投稿[7]をOA運動の契機として紹介している．これは研究者自身による雑誌投稿論文のプレプリント・リプリントの電子公開を求める提案であり，後にBOAIの中でOAの実現手段の一つとして取り入れられたセルフアーカイブの呼びかけであった．

OA運動はこのように複数の起源と推進者を持つものであったが，これら関係者が一堂に会し，一つの運動を成すきっかけとなったのが2001年にブダペストで開催された会議と，それを受け翌年に発表されたBOAIである． BOAIはOAとは何かを明確に定義し，その実現手段も示したことで，後のOA運動の方向性を決定づけたとされる．BOAIの詳解は後節2.3において行う．

このようにBOAIにいたるまでの背景について，諸活動やその担い手の面からのまとめは存在する．これはOA運動を学術情報流通の世界で生じた問題とその解決手段の模索，

という側面から捉えたものであるといえる．しかし，OA運動に関係する諸団体・個人の中には，学術情報流通を専門とするものだけでなく，政治，経済，思想的意図を持って活動に参加したものもいるように考えられる．例えばBOAIの宣言時の署名者は16人いるが，その中にはSPARC，PLoS，BioMed Centralの代表やHarnadに加え，OSIの職員が3名含まれる．そもそもBOAIはOSIの援助によって開催・発表されたものであり，その草案起草者であるPeter SuberもOSIからの支援を受けOA運動に関わるニュースレターを発行している[8]．詳細は後述するが，OSIは政治思想に基づく意図を持って資金援助活動を行う団体であり，OA運動への関与もこの思想的背景のもとに行われたものと考えられる．実際にはOSIに限らず，なんらかの思想的背景，あるいは私的な利害関係に基づいてOA運動に参加した個人・団体は少なくないと考えられるが，このような各参加者の背景まで踏み込んだOA運動についての議論はこれまでほとんどない．しかしこのような背景まで理解していくことが，皮相的な理解にとどまらずOA運動とは何であるか，この運動の中で誰が何を獲得し，何を実現しようとしているかを知る上では重要なのではないだろうか．それによって，OA運動の理念をある意味で素朴に受け入れ，参加している人々にとって自身の立ち位置を見直す契機を与えうるのではないか．

以上のような問題意識に基づき，本稿では前半2.1～2.3節においてOSIの思想的背景とそのBOAIへの影響を概観する．後半3.1～3.3節では，OA運動に関する文献群中でのBOAIへの言及状況を調査することにより，これら思想的背景がOA運動の中で認知されていないことをあらためて確認していく．4章ではこれらの結果をまとめ，OA運動の伏流水として流れている思想と計画の存在，その運動内に与えうる影響について検討する．

1.2 先行研究の系列

BOAIの思想的背景に直接言及する研究はこれまで見当たらない．しかし，傍流的な意味における先行研究はいくつか認めることができる．BOAIの思想的根拠については次節以降で詳解するため，本節で詳細に立ち入るのは避けるが，哲学者であるKarl R. Popperが『開かれた社会とその敵』[9]において提唱した「開かれた社会」がBOAIの根底として存在する．この「開かれた社会」への言及や解題書は多く書かれている（たとえば[10][11]）．ただし，「開かれた社会」を図書館情報学に関連させて議論した話題はほぼ見当たらない．

より広義にPopperを捉えた際のPopperと図書館情報学のかかわりとしては，1980年代に盛んに行われた一連の研究が存在する．Popper後期の思想とされる客観的知識論を図書館情報学の固有の哲学的基礎付けとして位置づけようとしたものに，イギリス・シェフィールド大学の著名な図書館情報学者である，Bertram. C. Brookesがいる．Brookesを受けて，客観的知識や，Brookesの研究について検討した研究には村主がある [12].

Popperは思想史上，Karl Marxを批判した人間であり，時期によっては保守反動の巨頭とみなされていた．ゆえに過去において，Popperに関する積極的な言及は意図的に避けられてきた経緯があるとされている．しかし，現代においてはPopper再評価ともいえる機運が高まっており，従来の思想的なバイアスを外した形で議論できる時期にさしかかっているといえる．

OA運動と類似点が認められるもので，ソフトウェア開発手法の一つであるオープンソースの概念をPopperと結びつけて論じるものとしては飯高がある[13]．また，思想的根拠にまでは踏み込んでないものの，酒井は現代ロシアの図書館がOA運動にどう接近しているかを詳解している[14]．しかし，前者は相互対話的な開発とは何かという，あくまでもソフトウェアを対象とした議論を主眼としており，後者はソビエトという「閉ざされた社会」を開かれた社会とするためのOSIといった視点で議論され，興味深くはあるものの，先に述べたように詳細な思想的根拠にまで踏み込んでいるとは言い難い．

BOAIがOA運動をどのように駆動したか，そしてBOAIと現在のOA運動の乖離について考察した研究については佐藤・逸村によるものがある[15]．これは本稿の枠組みにおける先行研究に近しいものの，本稿が主眼とするBOAIの思想的根拠にまで踏み込んで議論はしていない． そこで，本稿ではBOAIの思想的根拠にまで立ち戻って議論をし，OA運動の源流を確認しなおす視座の獲得を行う．

2章以降の構成は以下のとおりである．2.1節では，OSIの立役者である投資家・篤志家，George Sorosについて紹介する．Sorosがどのような意図を持って「オープン」を推進しているか，過去どのような事例が存在したか，OSIをどのような意図で成立させたか，について言及する．2.2節では，Sorosの精神的支柱と言える哲学者， Popperとその思想を概観する．Sorosが依拠する「オープン」の思想はPopperに負うところが大きいからである．以上の思想的背景を捉えた上で，2.3節では，OSIと，OSIが中心になって発表したBOAIについて詳述する．

2 Soros, Open Society, OSI

2.1 Sorosと開かれた社会

本節では，BOAI 発表の中心となった OSI を立ち上げた，Soros の経歴や思考等に触れる．Soros は投資家・篤志家・哲学者という肩書きで紹介されることが多い．本節で紹介する OSI および Soros の生い立ちについては，Michael T. Kaufman『ソロス』[16]を参考とした．

Soros の慈善事業は 2.2 節で後述する「開かれた社会」に深くコミットしている．Soros はハンガリー出身であり，父はエスペラントの話者であった[16]．Soros はユダヤ系でありながらもそれを巧妙に隠しナチスに協力するふりをしつつ戦争中のハンガリーを生き延びた．その後，ナチスの後に進軍したソ連の占領を受けたハンガリーから，Soros は 1947 年 ，17 歳の時に脱出し，イギリスに移住している．何年間も両親の援助がうけられない Soros は苦学生として様々なアルバイトを行っていた．1949 年に London School of Economics（LSE）に入学する直前の夏休みには，彼はあまり人の入っていないプールの監視員の仕事にありつき，図書館や友人から借りた本を読みふけっている．Soros はこれを「人生の中でも指折りの楽しい夏休み」と語っている．そのときに触れた Popper の『開かれた社会とその敵』が Soros の人生のなかで決定的な指針となる．Soros 自身，自著でこう記している．

私の思考は…いちばん身に染みている影響は…ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（筆者註．LSE）の最終年度にチューター（個人指導教員）を努めてくれたカ

ール・ポッパー[sic]から受けたものである．…ポッパーの『自由社会の哲学とその論敵』は天啓のように私の心を強く打ち，この著者の哲学の探求へと駆り立てたのである[17].

Popperは1946年にLSEに着任しており，Sorosはちょうど直接指導を受けることが出来た立場にいたことになる．Soros自身，LSEの在学中はPopperのような哲学者，あるいはJohn M. Keynesのような経済学者を自らの目標としていたようである．しかし学力及び外国人という点がSorosのその夢を阻む．

その後のSorosの足取りは他の伝記等に譲るが，Sorosの出身であるハンガリーにソロス財団を設立した後に行われた「コピー機事件」[18]が白眉であろう．当時のハンガリーは共産党による一党独裁であった．Sorosが「開かれた社会」を推進し，また，共産党にしばしば見られるような一党独裁を大きく攻撃するのにはSorosの幼少期の記憶が色濃く影響を与えていると思われるが，最初にターゲットに絞ったのは，生まれ故郷のハンガリーとその共産党であった．ハンガリー共産党からはOpen Society Instituteという名前は許可されなかったため，Sorosは「ハンガリー科学アカデミー/ジョージ・ソロス財団」という名前で活動をはじめる．財団はまず図書館や大学の司書をターゲットとし，統制下のハンガリーでは入手困難な本をイギリスやアメリカから買い集め，それを販売することを試みた．そのなかには発禁本も多くあったため，司書らの注目を大きく集めた．次に財団が試みたのが，「コピー機事件」である．ゼロックス・プロジェクトともいわれるこの事件は「閉ざされた社会」であるハンガリー共産党の独裁を破壊するというセンセーショナルな結果を巻き起こした．

ソロス財団の中心人物の一人，Miklos Vasarhelyiはハンガリー在住でコロンビア大学に留学経験があったが，アメリカと比べハンガリーでは複写のための労力が膨大なのに気づいていた．機密保持のために複写機は専門機関が鍵を掛けて保管し，複写のためには申込書に必要事項を書き込む必要があり，しかも申込内容を検閲された上でようやくコピーが可能であった．そこで財団は年間200台を越えるコピー機を大学等の研究機関に無償で配布した．この配布は数年間続き，情報の伝達力はとたんに上昇した．Kaufmanはこう記している．

誰にも邪魔されずに情報に接触できるというアクセス権を意味するばかりでない．市民それぞれがデータを見つけ，それを自由に利用するという市民参加の概念を象徴するものになるのだ．批判精神を広げ，教条主義的な思考を打破するために，これ以上の手段があるだろうか？ ……この複写機持ち込み計画は，書籍販売計画をさらに上回る成功を収めた．突如として，何の告知もなく，知的職業に就いている者や大学関係者は，自分の望むは[sic]何でも――研究論文でも，恋文でも，資産記録でも，政治関係や宗教関係のパンフレットでも，むろん検閲ずみの資料でも――すべてコピーがとれるようになった．独裁体制下の主要なルールの一つがいつの間にか変更されていた．つまり，とくに許可されていないものはすべて禁じられる，というルールはなくなったということだ[16](p.298)

ハンガリー共産党一党独裁が破綻した後も，ソロス財団はさらに発展している．例えば1994年から2000年にかけてSorosが各財団

に提供した総額は25億ドル超であり，医学研究にのみ援助を絞った２つのある財団を除けば，Sorosの提供額は世界最大ということになる．ソロス財団の特徴を指摘して，Kaufmanはさらにこう書く."こうした数字はたしかに関心を呼んだ．だが，Sorosの慈善事業は，その莫大な提供金額よりも別の面で際立っていた．ほかの財団と比べてかなり異例だったのは，「オープン・ソサイエティ・インスティテュート」[sic]が，現存の資金提供者が自分の哲学，願望，直感を反映させる一種の道具だったことだ"[16]（p381）

次節からは，このように Soros が慈善事業を行うようになった背景的思想とされる哲学者，Popper と彼の思想を紹介する．ただし，Popper の哲学は，「反証可能性」概念や脳科学，確率論などへの言及に至る科学哲学から，本稿で主要な参考とする『開かれた社会とその敵』に代表される政治哲学までをも含む，幅広い色彩を持つものである．そこで，本稿では代表的とされる一部を取り上げて紹介する．

2.2 Popperによる説明

科学哲学者でもあるPopperが提唱したものには二つのよく知られた概念がある．一つは，科学と疑似科学の境界設定問題である「反証可能性」[19]であり，もう一つは「開かれた社会」[9]である．反証可能性とは，「科学的理論は自らが誤っている可能性についてのテストを考案し，実行することができる」というものである．一方，疑似科学は自らが誤っている可能性についてのテストを考案できないか，ないしは，自らが誤っている可能性を認めず，常にアドホックな言い逃れによって理論の延命を図るという．この，自らが誤りを認めることができるからこそ「科学的」であるという考え方は，Popperが1934年に独語で上梓した『探求の論理』（Logik der Forshung）や1959年に前掲書を英訳した『科学的発見の論理』（The Logic of Scientific Discovery）で広く知られるようになり，現在でも，疑似科学と科学の線引き問題でもっとも引用される概念である[20].

反証可能性に通じる立場には認識論的には反基礎付け主義という考え方が通底している．基礎付け主義の立場は，デカルトのコギトに代表されるような明晰判明を基とする古典的な基礎付け主義や，現代における穏健な基礎付け主義などにいくつかに分類されるものの，いずれにせよ，何かの認識のもとに基礎となる確定した基礎的信念を要請するという立場である．これは真とは何か，といった探求をもたらす原動力ともなろうし，一神教的な立場と親和性があるという論者もいる[21].

一方，Popperらの思考は，反基礎付け主義というように，絶対的な真という概念を最初から拒否する立場で行われる．たとえば，Popper哲学の"番頭"と呼ばれる，Hans Albert は，何かの判断に根拠を求めようとすると，無限後退，循環，あるいは恣意的な議論の打ち切りにしかならないと主張しており，これはミュンヒハウゼンのトリレンマとよばれている[22]．このトリレンマによれば，定義の絶対的基礎づけは困難に陥るとする．その回避方法として，Popperらの発想は対話によってよりよい真に漸近的に近づいていこうとするアプローチをとる．これは，真理をあきらかにする欲望を放棄したペシミスティックな視点であると評する論者もいるが[23]，Popperの視点では絶え間なく漸近的に真理に近づこうとするソクラテスの問答法

こそが人間精神の発露であり，むしろオプティミスティックな立場にあるといえる．Popperの発想は，Popper自身ユダヤ人であり，ナチスドイツに親類が殺されるなどのいくつかの迫害を受けてきたにもかかわらず，首尾一貫して人間精神に対して，楽観的な議論が行われていると指摘される[24].

以上のように，反証可能性とは絶対的な真を求めない一方で，漸近的な真を希求するトライアル＆エラーの科学を営む上での方法論であり，これを社会に適用させたものが「開かれた社会」の概念であるとされる．「開かれた社会」は1945年に上梓された『開かれた社会とその敵』で広く知られるようになった．「開かれた社会」の概念は，閉ざされた社会との対比として捉えるのが妥当であると，後述するSorosはいう．閉ざされた社会とは，独裁政治による社会のことであり，あるいは全くの変化を受け入れない社会のことである．

Popperは1937年にナチスドイツからの迫害から逃れるためニュージーランドに出帆し，その地で『開かれた社会とその敵』を書き上げている．『開かれた社会とその敵』は，プラトン，ヘーゲル，マルクスを激しく批判し，また，全体主義の萌芽をプラトンに求めている．開かれた社会の対比概念となる「閉ざされた社会」は，概説的には以下のようになる．「"科学的"理論」によって裏打ちされたと僭称する社会計画は，賢人政治であるがゆえに誤りを認めない．それゆえ軌道修正の機会を逸するがために，逆説的にディストピアを招く．このディストピアの萌芽について，Popperはプラトンの政治思想を「すべての政治変化を阻止せよ！」と定式化し[9](p97)，プラトンにとって国家はイデアの忠実な写しであり，静止こそが神聖であるとする．そして，プラトンは「無知な多数者に対する賢明な少数者による自然な階級支配」を善としたと激烈に批判する．つまりエリート層による政治は全体主義的独裁を不可避に招くとし，一方で多数の人数によるボトムアップ式の政治思想こそが常に軌道修正の機会が開かれているために，全体主義に帰着しないと論じる．この，多数の人間に向かって開かれた社会は，相互討論により漸近的に社会を改良する思想である．ここには賢人的指導者は存在しない代わりに，常に「自らの誤りを糺す」機会が与えられるがために，全体主義的地獄は招かないという．

Popper はこの発想をソクラテスの問答法に求め，対話による社会の漸進をとなえる．しかし，あくまでも口頭での「対話」を重視するソクラテスの問答法と大きく異なるのは対話の礎に記録物を想定しているところである．

Popperはキケロの稿に依拠しつつ，アテナイでは市場で簡単に様々な書物が手に入ったため，民主主義が発展したと論じる[25]．そのきっかけはペイシストラトスによる大規模なホメロスの出版が，アテナイの知的水準を向上させたことであるという．そして，記録物は随時参照可能であり，会話のような同時性を必須とした参加に必ずしも縛られない．またPopperによると，ギリシャ時代の民主運動をより巨大に発展させたものがグーテンベルクによる活版印刷であるという．つまりPopperの「開かれた社会」の概念には，記録物を媒介とするコミュニケーションを前提としているといえる．『開かれた社会とその敵』には記録物が媒介する討論という議論は前景化してこないものの，Popperは自伝のなかで前掲書を書く際に，ニュージーランドにおける資料の少なさについて批判的に

言及しており[26]，その経験が記録物の媒介へという発想に繋がったようにも思われる．このようなPopperの発想は，メディアや記録物のあり方や利用の意義を検討してきた図書館情報学ともかかわるものと考えられる．事実，記録物を媒介とした対話というアイデアは，Sorosにも引き継がれている．

次節からは，そのSorosの資金援助によって成立したBOAIと，それを根拠として活動している様々なOA関係者について調査をすることにより，Sorosの「哲学，願望，直感」がどう伝達されているかを見ていきたい．

2.3 OSIとBOAI

OSIは1993年にSorosによって設立された団体で，中央・東ヨーロッパおよび旧ソ連地域を中心にソロス財団の活動をサポートすることを目的とする．33のイニシアティブからなり，そのうちの1つInformation Program部門は開かれた社会実現のため，特に貧困地域における知識・情報のアクセス，交換，生産の強化を目的の一つとしている．OSIはこの部門を中心としてOA運動に積極的に参加しており，中でも重要なのがBOAIへの関与である．BOAIは2002年に発表された，学術文献をインターネット上で自由に利用できるようにすることを目的とした宣言である．OAとは何かを定義し，その実現のための２つの道（セルフアーカイビングとOA雑誌）を提示したこと等からOA運動の契機とされている．同様の宣言には後に発表されたBerlin宣言[27]やBethesda宣言[28]があるが，これらとBOAIの大きな相違点としてBOAIではその第一段落で「文献へのアクセス障壁を取り除くことで研究が加速し，教育の質が高まり，富んだ者と貧しい者の間で互いに学習を共有し，文献を最大限活用し，人類を共通の知的な対話と知識探究の場へ結びつける基礎を築くだろう」とし，OA運動の目的の一つとして，Popperが「よりよき世界を求めて」と呼ぶような「人類の共通の対話の場」を作ることを組み込んでいることが挙げられる．BOAIは2001年にOSIの主導により開催された会議に基づくものである．また，BOAIの草案の起草者であるSuberはOSIの経済的支援を受け，FOS Newsletter（現在のThe SPARC Open Access Newsletter），Open Access News[29]などのOA運動の伝播を担ってきた人物でもある．これらのことが他の宣言にはないOSIの意図をBOAIに盛り込むことになったのではないかと考えられる．

BOAIの本文はウェブ上にて可読である．URLはhttp://www.soros.org/openaccess であり，ソロス財団のドメイン直下付近に設置されている．また，FAQのページ[30]にはBOAIとOSIの関係についての記述がある．OSIはBOAIを招集した機関であり，最初のBOAIの署名者であると明確に記述されてある．また，PLoS はOAの議論でしばしば引き合いに出されるが，これとの差別化にも触れられている．PLoSのフィールドが主として科学を対象とするのに対し，BOAIはすべての学問分野に適用されると宣言している．さらに，PLoSは出版社的な機能を持つのに対し，BOAIは出版自体の機能は持たない一方で，オープンアクセスジャーナルとセルフアーカイビングの戦略提示を全面に押し出している．2002年の段階でOSIはOSI Information Programとして，BOAIを対象とすれば3年間，年間1万ドルの資金を連続して投入，OA運動には総額300万ドルの資金を投入し，持続可能なセルフアーカイビングの策定を行う等といった戦略をコミットメントで謳っている．このように，Soros財団の「オープン」

を志向する戦略のもとにBOAIは成立している．このオープンさは2.2節で概観したように，源流としての「開かれた社会」の思考がかかわっており，Popper－ソロス財団－BOAIと，特定のビジョンを目指す思想的な伏流水は一貫して流れているといえよう．

BOAIの各段落の解題は以下の通りである．第一段落ではOAの背景として科学者・研究者が業績を出版する際に原稿料を求めない伝統と新技術であるインターネットを挙げ，これらによって実現される学術論文への障壁のないアクセスによって前述のように研究が加速し，教育の質が高まり，人類共通の対話の場を作る基礎が出来るとしている．第二段落ではOAが経済的に妥当なものであること，利用者にとって役立つものであると同時に著者にとっても多くの読者を得て研究のインパクトを高めるなどの便益があるとしており，多くの人々がOA実現の取り組みに参加することでそのような便益をいち早く誰もが享受できるようになるとしている．第三段落ではOAとは何かを定義しており，OAの対象は「研究者が原稿料を受け取ることを期待せず公開している文献」であること，BOAI中におけるOAとは「インターネット上において，誰もが文献を読み，ダウンロードし，コピーし，再配布し，印刷し，検索し，それらの論文のフルテキストにリンクを貼り，インデキシングのためにクロールし，データとしてソフトウェアに流し込み，その他あらゆる合法的な目的のために，インターネットにアクセスできることそれ自体を除く経済的，法的，技術的な障壁なく文献を利用できるようにすること」としている．第四段落はOAのコスト負担に言及し，そのコストが従来の学術出版にかかるコストより遥かに低いことからOAの実現可能性の高さにつながるとしている．第五段落はOA実現のための2つの手段（著者自身が学術雑誌掲載論文をwebにアップする「セルフアーカイビング」と，最初から無料で利用できる雑誌である「OA雑誌」の創刊）について説明した段落である．第六段落はOSIがOA実現のために支援することの説明であり，第七段落は政府・大学・図書館などへの活動参加の呼びかけである．

OSIはBOAIの発表に関わったほか，OA運動に関わるプロジェクトに総額300万ドルの資金を援助すると発表した[31]．2005年4月までに，45のプロジェクトを対象に約177万ドルが拠出されている．その中には約15万ドルの助成を受けたDirectory of Open Access Journals，14万ドルの助成を受けたDirectory of Open Access Repositories等，後のOA運動の中で重要な役割を果たすツールへの助成も含まれている[32]．2010年現在も継続してプロジェクトを募っており[33]，OA運動の後押しとなっている．

このようにOA運動中で大きな役割を果たしたOSIであるが，その設立理念かつ活動目的として「開かれた社会」思想があることがどれだけOA運動関係者の間で認知されているかは必ずしも明らかではない．そこで以下ではまずOA運動関係文書中でのOSIおよび「開かれた社会」思想，その提唱者であるPopperに対する言及状況について調査した結果を述べる．次いで，BOAIの中で「人類共通の対話の場」について扱った第一段落について，同様にOA運動関係文書中での言及状況の調査結果を示し，「開かれた社会」思想がOA運動中でどのように扱われているのかを明らかにする．

3「開かれた社会」思想の認知状況調査

3.1 調査方法

分析の対象とするOA運動関係文書群は，webサイト"Bibliography of open access"[34]掲載文献のうち，同サイトからリンクされ，オンラインで閲覧可能なものとする．同サイトは2005年に出版された書籍『Open Access Bibliography』[35]を加筆・更新しているものである．『Open Access Bibliography』は出版時点でOAに関する最も網羅的な書誌としての評価を得ており[36]，その更新版である"Bibliography of open access"も網羅性の高いものとなっている．その他のOA運動関係書誌としてはThe Open Citation Projectによる"The effect of open access and downloads ('hits') on citation impact: a bibliography of studies"[37]があるが，こちらはOAが論文の被引用数に与える影響に関する文献を主として扱うものであり，網羅性に欠ける．さらに"Bibliography of open access"の特徴として，論文や図書のみでなく，webサイトや著名なブログ記事，メールマガジン等も含んでいる点がある．これらインフォーマルな情報源により，OA運動の成立結果のみならず，運動渦中の議論や参加者の意図等も含めて観察できることが期待できる．以上の理由から，本研究では"Bibliography of open access"を対象とした．

調査は二段階に分けて実施した．はじめにOA運動中でのOSI，「開かれた社会」思想，およびその提唱者であるPopperに対する認知状況を直接的に明らかにするために，文献群中でのこれらの語に対する言及状況を調査する．"Bibliography of open access"掲載文献のうち，全文がダウンロード可能なものを全てダウンロードした後，全文検索により"open society"または"Popper"を含むものを抽出し，文献群中での出現回数を集計した．合わせて，"open society"または"Popper"についてどのような文脈で言及しているかを目視により判断した．なお，検索時に大文字と小文字は区別していない．"Open Society Institute"については熟語中に"open society"が含まれるため，別に検索し直すことはしなかった．

第二段階は，「開かれた社会」思想およびPopperについて直接的に言及はしていないが，BOAIの中でこの思想の影響を受けていると考えられる第一段落に言及している文献の調査である．まず，第一段階と同様に"Bibliography of open access"掲載文献のうち，全文検索により"Budapest Open Access Initiative"または"BOAI"を含むものを抽出した．次に抽出した文献がBOAIのどの部分に言及しているかを，目視により確認・集計した．なお，どちらの調査でも，内容についての判断が主観的にならないよう，筆者ら2名それぞれが判断を行ったうえで，結果を統合した．BOAIの全七段落中，第一段落のほかに言及される頻度が多いと考えられるのはOAとは何かを定義した第三段落と，OA実現のための2つの道について説明した第五段落である．そこで本稿では抽出した各文献がこれら3つの段落の内容を引用しているか否かを分析した．さらに第一段落を引用している文献については，前述の第一段落の内容のうちOAの背景に関する部分を引用しているか，OAにより実現できるであろうことについて触れた部分を引用しているかを確認し，後者の場合には単に「研究が加速し，教育の質が高まる」という部分を引用するにとどまるの

か，「人類共通の対話の場」作りにまで言及しているかも確認した．「対話」とは，Popperが繰り返し強調する，「開かれた社会」概念の中心的キーワードである．この「対話」という表現は，2.3節で触れたBerlin宣言やBethesda宣言には存在しないものであり，BOAIの起草に際して，OSIの意図が象徴的に込められていると推測される．これにより，BOAIに言及する文献中で「開かれた社会」思想が意識されているか否かが判断できると考えた．

3.2「開かれた社会」およびPopperへの言及状況調査の結果

"Bibliography of open access"掲載文献の取得は2009年4月25-28日にかけて行った．調査実施時点での同サイト掲載文献は1,509件で，うち282件は有料雑誌等掲載文献または冊子体のみに掲載された文献等，リンクの貼られていない文献であった．同サイトからリンクを貼られている文献は1,227件あり，このうち292件がリンク切れによりファイルを取得できず，42件は動画ファイル等，内容の検索が不可能なファイルであった．これらを除いた，全文検索可能な文献ファイル893件を分析対象とした．

分析対象文献893件中，"Popper"を含む文献は1件もなかった．"open society"を含む文献は114件存在したが，すべて"Open Society Institute"に対する言及で，"open society"のみで文中に登場した文献はなかった[38]．OSIに対して強い思想的影響を及ぼしたPopperであるが，OA運動の中では直接的にはその存在は意識されていないと言える．

3.3 BOAIへの言及状況調査結果

前述の分析対象文献893件中，"Budapest Open Access Initiative"または"BOAI"を本文中に含むものは123件であった．表1はこれらの123件がBOAIのどの段落に言及しているかを示したものである．

表1 BOAIの引用状況

		第五段落に言及	第五段落に非言及
第一段落に言及	第三段落に言及	1	0
	第三段落に非言及	2	1
第一段落に非言及	第三段落に言及	1	24
	第三段落に非言及	18	76

表から第一，第三，第五いずれの段落にも言及していないものは76件，いずれかに言及しているものは47件であった．言及していないものの多くはBOAIの名称のみ挙げるか，実際の活動を中心に取り扱うなど本文の内容に言及していないもの，あるいはごく一部のみ取り上げているものである．本文に言及している文献で第一，第三，第五段落以外の段落に言及しているものはほとんどなかった．

本文に言及している47件のうち，第三段落（OAの定義）に言及しているものは全部で26件，第五段落（OA実現の2つの道）に言及しているものは22件であった．大部分の文献はBOAIをOAの定義の文脈かOA実現の2つの道の説明のために引用していると言える．

47件中第一段落に言及しているものは4件のみであった．これらの文献の書誌事項は末尾の付録に示す．第一段落に言及している4件についても，その文脈は「雑誌論文へのアクセス改善のビジョン」等として該当部分全体を紹介するにとどまる．OSIの意図する「人類共通の対話の場」についての踏み込んだ言及は全く行われていない．

以上2つの調査結果より，「開かれた社会」思想についてはOA運動の中で直接的に認知されていないだけではなく，BOAIの中で間接的にこの思想の影響を受けた部分についてもほとんど検討されてこなかった可能性が示された．

以上を細かな差異[39]には目を瞑りつつ図示すると以下のようになる．

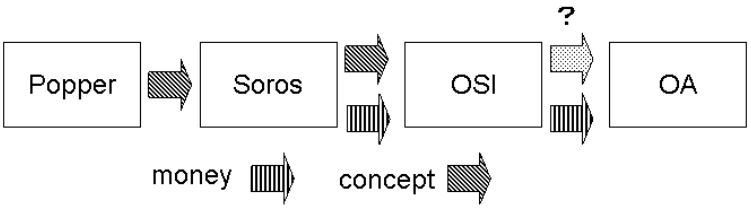

図1 「オープン」の思想と金銭的支援の伝達図

4. 考察と今後の課題

調査結果より，OSIはBOAI発布への尽力を始めOA運動の中で大きな役割を果たしているが，その活動目的がPopperの「開かれた社会」思想の実現にあることはOA運動中で認知されていないこと，少なくとも公に指摘されてはいない可能性が示された．しかし，OSIが「開かれた社会」思想の伝播とその実現につながると考えOA運動に関わっていることは疑いえない．

例えばOSIの「オープンアクセスプロジェクト」プログラムマネージャであるMelissa Hagemannは，OA運動にOSIがかかわる理由について，「開かれた社会」思想を明快に引きつつ，"知識とコミュニケーション資源を公平に分配することで—コンテンツ，ツール，ネットワークへのアクセスを提供することで，市民に力を与え，効果的・民主的な統治を実現することができる"としており，OSIのOA運動への参加の背景には「開かれた社会」実現を目的としていることを強調している[40].

「コピー機事件」においてSorosは表立ってはその意図を明らかにしないままに援助を行い，結果的に当時の共産主義独裁政権の打倒を成し遂げている．OA運動は既に欧米を中心とする資本主義・民主主義社会だけではなく，キューバや中国をはじめとする共産主義政権，シンガポール等の独裁政権下にある国や地域にも広まっている．ロシアにおいてOA運動によって「開かれた社会」の実現が期待されている[14]のと同様に，これら「閉ざされた社会」状況にある国々でのOA運動の普及が，今後第二・第三の「コピー機事件」となることは十分に考えられる．

無論，我々も（一応）自由主義陣営に属しているのであり，Sorosの意図と我々の姿勢が大局として衝突するわけではない．したがってSorosの意図までわざわざ気を配る必要もないかもしれない．しかし，OSIの背景に，閉ざされた社会を開かれた社会にしようとする，ある種破壊的な目的があるということ自体は，OA関係者に周知されてもいいようにも思われる．本稿では確証の高いと思われる事象の存在のみを論ずるに留め，それそのものが持つイデオロギーの善悪については踏み込まない．しかし，開かれた社会が，一種のイデオロギー的な思考法であることは間違いない．ナチス的，一元的なイデオロギ

ーを叩こうとしたPopperが逆説的により大きな一元的イデオロギー的な枠組みに囚われているというのは皮肉とされるが，たしかに，閉ざされた社会をもたらそうとする敵と，開かれた我々という形で敵味方を二分して議論する点については，（1）「開いた社会」を護持しようとして「その敵」を徹底的にたたくPopperの論法はそれ自身が全体主義の思考枠組みに囚われている可能性がある，（2）敵を論破するのではなく彼らとも共有しうる「重なりあう合意」をもってして「開かれた社会」を弁護すべきである，といった批判をうけつけうる[41]．このような批判の枠組みはそのままOSIの志向する破壊的な刷新等にも流用可能と考えられる．さらにいえば，閉ざされている社会を無理矢理開くことが善である，という前提がOSI内部には垣間見られる．我々は日常的には自由主義陣営にコミットしているがために，開かれた社会を是としがちな傾向にあるように思われる．一方で，多元的な文化相対主義を尊重する立場からすると，OSIに無意識的に準拠することは，多元性そのものを損ねていく可能性も否定しきれないであろう．

例えば，小林は日本におけるPopper受容のありかたを紹介した論文で"植木哲也は「開かれた哲学が排除するもの」で，Popper哲学に潜む西洋中心主義を鮮やかに摘出している"[42](p231)と書き，事実，植木はPopperが「我々の社会」を擁護するばかりであり，第三世界の人口爆発や莫大な廃棄物等「敵」の世界そのものへの感受性が鈍化していると指摘する．植木はこう書く．"だれもが参加できるということは，だれもが参加している，ということではない．ゲームに参加せず，このルールを無視する人物に対してどう対処すればいいのか．たとえば，足で蹴らなければいけないボールを，わきに抱えて走り出す選手が現れたとしたら．"[43](p282)．さらにここには「ゲームに参加したくない人を無理矢理ゲームに参加させることはよいことなのか」という問いも，加筆できるだろう．

本稿の主眼は現状把握を行うことであり，開かれた社会を進捗させることが是か非かという価値判断は本稿の埒外にある．しかしより実践的な側面から考えても，「開かれた社会」の実現という目的を持つOSIの存在は，OA運動全体に思想的な色合いを付け得るものである．前述のように既にOA運動は共産主義政権下や独裁政権下にも普及しつつあるが，「開かれた社会」思想の存在はこれらの国々でOA運動自体に対する懐疑を招きうる．これはOA運動をあくまで学術情報流通の中での問題解決と捉えたい者にとっては不利益ともなりうるものである．OA運動をOSIの資金援助のもとで行うことは，OSIの意図を意識的であろうと無意識的であろうと実現することに繋がり，つまりは「開かれた社会」の思想を実現していくことと地続きである．このことについて，OA関係者は無頓着なのではないかと言える．

以上，本稿では「開かれた社会」の思想を概観し，OA運動への影響について見た．ただし本稿は"Bibliography of open access"掲載文献中，同サイトからリンクされた，オンラインで入手可能な文献を対象に調査を行ったものであり，オンラインで入手不可能な文献等の中ではPopperや「開かれた社会」思想への言及が行われている可能性もある．また，実際は運動関係者が文献等の中で公には指摘しないだけで，OSIの意図の存在は意識している可能性はある．今後は聞き取り調査等により，OSIの意図についてOA運動関係者は明言を避けている，あるいは明言する必要性

を感じていないだけなのか, それとも実際に意識していないのかを明らかにする必要がある.

また，「はじめに」で述べたように，OA運動の背景には複数の起源があり, その参加者の意図するところも必ずしも一様ではない．OA運動を通じ「開かれた社会」を実現しようというOSIの意図がその一つであるが, 実際には別の思想的目的を持つ組織あるいは個人が運動内に存在することも十分に考えられる. これまで学術情報流通の外の世界にまで目を向けたOA運動の検討は行われてこなかったが，本稿で行ったOSIの背景の検討はこのような観点の必要性を示唆するものと言えよう．今後は，"Bibliography of open access"の定量的調査にとどまらず, 聞き取りといった質的調査を行うこと, さらに思想的背景の範囲をOSI以外にも広げて分析を行っていくことにより，OA運動の全体像を多面的に明らかにできるのではないかと考えられる.

註, 参考文献

[1] “Budapest Open Access Initiative”. http://www.soros.org/openaccess/read.shtml（2010 年12 月16 日参照）

[2] 時実象一 :「オープンアクセスの動向」, 情報管理，Vol.47，No.9，pp.616-624，2004.

[3] 倉田敬子 :「機関リポジトリとは何か」, MediaNet，No.13，pp.14-17， 2006.

[4] 倉田敬子 :「学術情報とオープンアクセス」，勁草書房，196p. ，2007.

[5] arXiv.org. http://arxiv.org/ （2010 年12 月16 日参照）

[6] PLoS. http://www.plos.org/ （2010 年12 月16 日参照）

[7] Harnad, Stevan: “Overture: The Subversive Proposal”. Scholarly Journals at the Crossroads: A Subversive Proposal for Electronic Publishing, http://www.arl.org/sc/subversive/i-overture-the-subversive-proposal.shtml（2010 年12 月16 日参照）

[8] Suber, Peter: The SPARC Open Access Newsletter, http://www.earlham.edu/~peters/fos/（2010 年12 月16 日参照）

[9] Popper, Karl R.（内田詔夫，小河原誠訳）:「開かれた社会とその敵」，未來社, 380p.，1980.

[10] 小河原誠 :「ポパー—批判的合理主義」, 講談社，391p.，1997.

[11] Magee, Bryan（立花希一訳）:「哲学と現実世界—カール・ポパー入門」，恒星社厚生閣，166p.，2001.

[12] 村主朋英 :「Karl Popperの“客観的知識”概念とその情報学に対する意義」, Library and Information Science, No.24, pp.1-10, 1986.

[13] 飯高敏和 :「日本的相互依存性のオープンソース・ソフトウェアに対する影響について」，情報メディア研究，Vol.6，No.1, pp.1-17，2008.

[14] 酒井剛 :「オープンアクセス・イニシアチブ : ロシアの図書館の現在と未来を象徴するもの」，情報管理，Vol.52，No.4, pp.241-245，2009.

[15] 佐藤翔, 逸村裕 :「機関リポジトリとオープンアクセス雑誌 : オープンアクセスの理念は実現しているか？」, 情報の科学と技術，Vol.60，No.4，pp.144-150，2010.

[16] Kaufman, Michael T.（金子宣子訳）:「ソロス」，ダイヤモンド社，492p.，2004.

[17] Soros, George（越智道雄訳）:「世界秩序の崩壊「自分さえよければ社会」への警

鐘」，講談社，412p.，2009.
[18] 橋本努：「ジョージ・ソロス—投資と慈善が世界を開く」，インターコミュニケーション. 2000 winter号，pp.160-176，1999.
[19] Popper, Karl R. （小河原誠，蔭山泰之訳）：「実在論と科学の目的」，岩波書店，370p.，2002.
[20] 伊勢田哲治:「疑似科学と科学の哲学」，名古屋大学出版会，282p.，2002.
[21] 西垣通;竹之内禎:「情報倫理の思想」，NTT出版，242p.，2007.
[22] Albert, Hans（萩原能久訳）：「批判的理性論考」，御茶の水書房，347p.，1985.
[23] 佐伯啓思：「現代社会論」，講談社，293p.，1995.
[24] 萩原能久：「日本におけるポパー政治哲学受容の一側面」,『批判と挑戦』未來社，pp.179-201，2000.
[25] Popper, Karl R.（河上倫逸訳）：「ヨーロッパ文化の起源－その文学的および科学的根源」，『開かれた社会の哲学—カール・ポパーと現代』，未來社，pp.12-28，1994.
[26] Popper, Karl R.（森博訳）：「果てしなき探求〈下〉」，岩波書店，267p.，2004.
[27] “Berlin Declaration on Open Access to Knowledge in the Sciences and Humanities”. http://oa.mpg.de/openaccess-berlin/berlindeclaration.html（2010 年12 月16 日参照）
[28] “Bethesda Statement on Open Access Publishing”. http://www.earlham.edu/~peters/fos/bethesda.htm（2010 年12 月16 日参照）
[29] Suber, Peter: “Open Access News: News from the open access movement”. http://www.earlham.edu/~peters/fos/fosblog.html（2010 年12 月16 日参照）
[30] “Budapest Open Access Initiative: Frequently Asked Questions”. http://www.earlham.edu/~peters/fos/boaifaq.htm（2010 年12 月16 日参照）
[31] “Budapest Open Access Initiative supported by the Open Society Institute's Information Program”. http://www.soros.org/openaccess/commitment.shtml（2010 年12 月16 日参照）
[32] “Open Access Projects supported by the OSI Information Program as of April 2005”. http://www.soros.org/openaccess/grants-awarded.shtml（2010 年12 月16 日参照）
[33] “Open Access Initiative Grantee List”. http://www.soros.org/initiatives/information/focus/access/grants/open_access（2010 年12 月16 日参照）
[34] “Bibliography of open access”. http://oad.simmons.edu/oadwiki/Bibliography_of_open_access（2010 年12 月16 日参照）
[35] Bailey, C. W.: “Open access bibliography: liberating scholarly literature with e-prints and open access journals”. Association of Research Libraries, 130p., 2005.
[36] 三根慎二：「オープンアクセス・機関リポジトリ関連の日本語文献」，http://www.openaccessjapan.com/2005/02/post-1.html （2010 年12 月16 日参照）
[37] “The effect of open access and downloads ('hits') on citation impact: a bibliography of studies”. http://opcit.eprints.org/oacitation-biblio.html（2010 年12 月16 日参照）
[38] ファイル単位で検索を行った場合, OSIを含まない文献で“open society”に言及しているものとして2002年9月15日発行のFOS Newsletter（http://www.earlham.edu/~peters/fos/newslette

r/09-15-02.htm）がヒットする．しかしこれは複数の記事を1つのファイルにまとめたニュースレターであり，そのうち“Bibliography of open access”に取り上げられた記事と“open society”を含む記事は異なっていた（“open society”が含まれる記事は“Bibliography of open access”に掲載されていなかった）．そのため，“Bibliography of open access”掲載文献中でOSIに関係する以外の文脈で“open society”に言及したものは1件もなかったといえる．

[39] SorosはPopperの思想を「再帰的」という概念を用いてさらに拡大していると主張しているため――それが成功しているか否かという評はともあれ――，このような単純な矢印は細かな差異を取りこぼしている可能性がある

[40] Poynder, Richard: ““Interview with Melissa Hagemann of the Open Society Institute”. Open and Shut?”, http://poynder.blogspot.com/2005/06/interview-with-melissa-hagemann-of.html（2010 年12 月16 日参照）

[41] 川本隆史：「ロールズ－正義の原理」講談社，318 p.，2005.

[42] 小林傳司：「日本におけるポパー哲学受容の一形態」，『批判と挑戦』未來社，pp.202-244，2000.

[43] 植木哲也：「開かれた哲学が排除するもの」，『批判的合理主義・第２巻：応用的諸問題』未來社，pp.272-290，2002.

（2010年7月9日受付）
（2011年5月1日採択）
（2011年5月20日オンライン公開）

付録 BOAIの第一段落に言及している文献の書誌事項

Friend, F. J: “Improving access :Is there any hope?”, Interlending and Document Supply, Vol.30, No.4, pp.183-189, 2002.
Olden, Kenneth; Goehl, Thomas J: “EHP moves to open access”, Environmental Health Perspectives,. Vol.112, No.1, pp.A13-A14, 2004.
“What is best practice for open access?”, *Research Information*, http://www.researchinformation.info/risummer02soros_open_society.html（2010 年 12 月 16 日参照）
Morrison, Heather: “Peter Suber: heart of the open access movement”, *OA LIBRARIAN*, http://oalibrarian.blogspot.com/2006/12/peter-suber-heart-of-open-access.html（2010 年 12 月 16 日参照）